

はじめに

本書は、人文学を学びたい、あるいは人文学について知りたい、という方に向けられています。

人文学はなぜ重要なのでしょうか？

一言で答えるなら、真理ではなく意味を追求するからだ、ということになります。そして、あらゆる人生に真理はなく、ただ意味だけがあるからだ、と。

真理と意味

真理というのは、不変でなければなりません。いつでも、どこでも、誰にでも、通用するのが真理です。したがって、真理はつねに一つでなければならず、たえず同じでなければなりません。

他方、意味というのは多様です。同じ物事が異なる複数の意味を持ちえます。たとえば第二次世界大戦がほとんどの人々にとって非常にネガティブな意味をもったことは疑いようがありません。人類史上最悪と言えるほどです。しかし、国家機構や法制度の見直し、人権に関する新たな意識、植民地主義や戦争そのものへの懐疑など、それまで放置されがちだった事柄について、後からポジティブな意味がもたらされたこともたしかでしょう（だからといって戦争を正当化できるわけではまったくありません）。同様に、当時の若者に目標として教え込まれた「お国のために死ぬ」という発想が、今日では批判的に捉えられていることも、意味の多様性を示す事柄です。

このように、意味には少なくとも良い意味と悪い意味がある——そしてそのグラデーションは無限にある——わけですが、真理は良くも悪くもなく、どこの国のいかなる立場の人にとっても、ただ一つでなければなりません。

とはいえ、誰にとっても同じ不変の真理というものも、もちろん不可欠です。核爆弾の構造はどのようなものなのか、これと原子力発電はどう違うのか。人口に比して電力はどれくらい必要で、原子炉にはどれほどの耐用期間があるのか。放射性廃棄物とは何か、ほかの有害でない発電方法はないのか。こうした問いには確定可能な「正解」があります。その「正解」こそが真理です。そして唯一の正解、変わることはない真理を追究するのは、自然科学の役割です（ついでながら「正解」に基づかない政策は、すべて非科学的です）。

自然科学の対象は、自然です。近代科学が発達する以前、自然を対象とする学問は自然学と呼ばれていました。古代ギリシア語では自然は *phusis*、英語の *physics* の語源です。 *physics* は物理学と訳さ

れますが、物理学の「物」とは自然物、自然界の「物」を指します。そうした「物」の「理」、つまり真理を探究するのが、もともと自然学だった物理学です。知が深まるにつれて対象となる自然物もどんどん広がっていったため、自然学もそれに応じて物理学や化学や生物学などに分かれて展開していったわけです。しかし、今日「理系」と総称されるこれら自然科学の諸分野は、基本的には自然を対象とし、真理を追究していることに変わりはありません。

こうしてみると、人間を対象とし、意味を追求する人文学との違いがよくわかります。人間を自然界の「物」と同一視することはできません（人体を「物」のようにみなすことはできませんが、それによって発達したのは自然科学の一部としての医学です）、人文学はもっぱら唯一の真理を目指しているわけではないからです。

前提された対象

ところで、「文系」と総称される学問分野には、社会科学と呼ばれるカテゴリーもあります。法学や経済学や社会学がこれに含まれます。社会学の対象は、もちろん社会です。対象とは前提でもありません。つまり、法学にとつての憲法や法律、経済学にとつての貨幣経済や資本主義、社会学にとつての具体的な人間集団や人間社会は、それぞれ対象であると同時に前提でもあるということです。前提となっているものをみずからの対象として措定した上で、研究を進めるのが科学です。この点では、自然科学も社会科学も同じです（後述のように、人文学もそうしないわけではありません）。

こうした科学的所作の難点は、対象とした前提の存在そのものを疑いにくい点にあります。太陽が地球の周りを回っているのか、それとも地球が太陽の周りを回っているのか。これはすでに自然科学的な問いです。しかし、そもそも太陽がなかったらと考えるとしたら、別の道を歩み始めることになるでしょう。「もし太陽がなかったら」という発想そのものが、自然科学の通常の道程を超えています。同様に、今ある憲法や法律、現行の貨幣経済や資本主義、既存の人間集団や人間社会などについて、その存立を根本から疑う法学者や経済学者や社会学者は、一般的な社会科学の考察からは外れることになります。あえてそうする学者がいるとしても、その勇氣やインスピレーションは自然科学でも社会科学でもありません。

したがって、こう言うことができるかもしれませんが。科学が尽きるところで人文学が始まる、と。自然や社会といった眼の前にある対象を、そのまま自明なものとして受け取らなくなるとき、人文学が始まる。自然の事物や社会制度をいわば斜めから眺め、前提となる対象の所与性自体に疑いを抱くとき、人文学が始まる。「我思う故に我在り」さえ懐疑的に捉え、人間存在の真理というより、その意味を考えるとき、本当の人文学が始まる、と。

かじるいと

本書は、人文学のレッスンです。

目次にある通り、第一部は文学、第二部は芸術、第三部は歴史に割かれています。各部がどのよう

な観点から書かれているのかについては、それぞれの最初の頁——扉裏——を参照してください。今ここでは、なぜ文学、芸術、歴史なのか、簡単に説明しておきます。

まずもつて言っておかなければならないのは、これら三つは完璧に独立しているわけではないということです。つまり文学、芸術、歴史というのは、絶対的な区分ではありません。むしろ相互に絡み合っています。物理学、化学、生物学は対象に従って区別されますが、それと同じ仕方です。文学、芸術、歴史を厳密に区別することはできません。

また文学、芸術、歴史だけで、人文学そのものを把握することは不可能です。ほかにも分野がある——哲学、宗教、倫理などがある——からというのではなく、人文学そのものを知ることは誰にもできないからです。それはたとえば、音楽そのものを聴くことは誰にもできないのと同じです。つまり耳にできるのはバッハやベートーヴェンの個々の曲だけで、どれほど聴いてもクラシック音楽そのものを聴いたことにはならないということです（もちろんロックやジャズについても同様です）。

こうした場合、逆にできるのは、かじることです。すべてを把握することができなくても、かじることで重要な何かに触れることができます。フランスパンを、まさに「かじる」としましょう。この場合、フランス料理そのものに及ばないのは当然ですが、それでもフランス料理にとって非常に大切な何か——それなしではフランス料理が成立しない基礎中の基礎——を味わったことになるはずですよ。同様に、文学、芸術、歴史をかじることで、人文学の根幹に近づくことができます。

「開かれ」について

なぜなら、文学、芸術、歴史は、人文学のいわば代表曲であり、代表料理だからです。「もし太陽がなかったら」という仮定が、自然科学の通常の道程から外れることは先に述べました。前提となっている対象の存在を疑い、目の前にある客観的な事実とは異なる仮定を試みた先にあるのは、一種の虚構、フィクションです。現にあるのとは別の世界が、そこには広がっているはずですが、そうした虚構ないしフィクションを許容する制度こそ、文学であり芸術にほかなりません。文学もまた芸術の一部でありますが、もっぱら言葉を使用する点で、絵画や音楽からは遠ざかることとなります。逆に、演劇や芝居など、言葉を多く使用する芸術は、それだけ文学に近いこととなります。本書では、こうした多様性を味わいながら、両方をかじることとなります。

とはいえ、文学や芸術の意義は、あらかじめ明確にしておきたいと思えます。すなわち、目の前の世界とは異なる別の世界を開示すること、またそれによつて現実世界を別の光のもとで見えるようにすることです。文学や芸術は娯楽とか余興と捉えられがちですが、それだけではないのです。もし文学や芸術がなかったとしたら、どうなるでしょうか？ 一部の人々にとつて趣味の世界が失われるだけではありません。あらゆる人々にとつて現実世界を捉え直す機会がまると失われるのです。全体主義的な政治が文学や芸術を抑圧しようとする理由も、ここにあります。支配者にとっては、現実世界に疑いを差し挟む人々がいけない方が都合だからです。

同様に、全体主義的な政治は、歴史も嫌います。あるいはみずからの都合にあわせて改竄し、修正します。そのようにして改竄され修正された歴史が無意味であることは明らかでしょう。正確な事実に基づいていないからです。この点で、歴史学者のアプローチは、文学や芸術におけるのとは逆に、科学者のアプローチに近づくように思われます。つねに不変で同一の事実——つまり眞実——を確定することが、最初の仕事になるからです。

しかし、個々の事実そのものは、まだ歴史ではありません。もろもろの事実を時系列に沿って報告するだけなら、どれほど正確であろうとも、単なる事実確認にとどまります。そうではなく、事実と事実のあいだの関係を考察し、複数の事実から一つの知られざる事象を導き出して示すこと。そのようにして、すでに知られた現実世界のうちに別の解釈の可能性を開くこと。これが歴史学の社会的役割です。その実践的性格は、文学や芸術に通じています。結局のところ、眼前の対象を自明視せず、現実世界を過去にも未来にも開かれたものにするのが、文学、芸術、歴史の共通点だと言えるかも知れません。

そして、そのような「開かれ」こそが、とりもなおさず人文学そのものを特徴づけるのです。それは「今ここ」を別の時間と別の空間に接続することにほかなりません。自然科学や社会科学では、みずからの対象が目のあることを前提とするがゆえに、「今ここ」に規定されることとなります。いつでもどこでも通用する真理は、どんな任意の時点でも確認可能でなければならず、そうである以上、まさに「今ここ」で確認できるのでなければなりません。しかし人文学では、目の前にある対象そのものを疑うがゆえに、必ずしも「今ここ」に縛られなくてもよいこととなります。人間が生きる

時間は、不可避免的に流れ去る物理的な時間軸には還元されません。そうした別の時間があらかじめ導入されているからこそ、目に見える現実世界とは異なる視野が開かれるのです（なお「開かれ」という表現は、ジヨルジョ・アガンベンという哲学者の著書を踏まえたものです）。

レッスンの意味

だからといって、誤解してはなりません、科学と人文学は対立しているわけではありません。むしろ両者は補い合う関係にあるのです。科学者にとっても、閃きは不可欠です。閃きとは、「今ここ」に何かが参入してくる経験です。逆に言えば、別の時間と別の空間に「今ここ」が接続されるわけです。この電光石火の「開かれ」は、人文学的な次元に根ざしています。他方、人文学にとっても、眼前の対象を考察する際に、科学的な思考様式が有用であることは言うまでもありません。本書自体、その意味で十分に科学的——分析的で認識論的——です。このように科学と人文学は互いに互いを必要としており、一方なくして他方はないのです。

したがって、科学が重要だからこそ人文学もまた重要だ、ということになります。唯一不変の真理を追究する科学なくして、今日の生活を考えることはできません。同様に、多様な意味を追求する人文学なくして、私たちの人生を考えることはできません。

本書は、そうした人文学のレッスンだと言いました。レッスンというのは、ラテン語の *lectio* 「読むこと」、*lectio* 「私は読む」に由来します（*lectio* には「私は集める、選ぶ」という意味もあり

ます。文学、芸術、歴史をかじるというのは、「読む」ことを学ぶことにほかなりません。そしてかじることのうちには、味わうことも含まれます。意味や吟味のためには、よく味わうことが不可欠です。文学や芸術や歴史をたんなる趣味にとどめないためには、ただ味わうのではなく、よく味わうこと、よく「読む」ことが必要なのです。

そのために、まずはひとつひとつの章を、ゆっくりかじることをおすすめします。場合によっては、読み返したり、読み直したりすることも、よく味わうためには重要です。その上で、四つの章から構成される文学、芸術、歴史のそれぞれについて、どんな味がしたかを考えてみてください。つまり文学とは何か、芸術とは何か、歴史とは何か、それらそのものについて振り返るということです。その際、各部の先頭の頁——扉裏——にある文章がヒントになるでしょう。こうして、だんだんと「読む」ことがわかってきます（ただし、前述の通り「正解」はありません）。

さらに、各章の終わりには「読書案内」があります。こちらは人文学をより深く味わうための案内です。各執筆者が手に取ってみてほしいと考える本が紹介されていますので、面白いと感じた章や関心を持った事柄をもとに調べてみてください。なかには図書館にしかない本もありますが、探索の楽しみも味わってもらえればと思います（これによって Lego の別の意味「私は集める、選ぶ」も成就されます）。

また末尾にある「質問箱」は、本書や人文学全体に関わる Q & A になっています。いわば取扱説明書のような内容も含まれていますので、場合によっては、こちらを最初に確認するといいかもしれません。明日への道筋については「おわりに」も大切です。

最後に、ここでもう一度、「もし文学や芸術や歴史がなかったら」と考えてみてください。「もし太陽がなかったら」という仮定と同じく、「真つ暗闇」という帰結になるのは、もはや言うまでもないことでしょう。

だとすれば、人文学とは私たちにとって太陽のようなものであり、意味とは太陽が育む無数の命——有為転変に充ちた地上の生——であることになります。実際のところ、〈複数の人間性〉 Humanitiesこそが、まさに人文学なのです。

したがって、本書もまた異なる無数の意味、地球の上での偶然の出会いに基づく複数性と多様性に開かれています。その複雑で豊かな味わいは、新型コロナウイルス禍下の味覚障害も、全体主義的な政治も、決して奪うことができません。

そして付言するなら、そこにはまた根本的な自由の萌芽があるはずです。

小森謙一郎